

## 巻 頭 言

2011年3月11日、日本はほんとうに大きな災害に見舞われました。その後、続いて原発の事故が起きて、私は今も、日々、3月10日以前とはまったく異なる世界に生きているかのように感じています。

立教大学では、今年度の学年暦は再検討されて、結局、前期の授業はゴールデンウィークあけの開始となりました。そうしたときに、司書課程では、特任教員と課程主任の交代がありました。千代正明先生の後任には永田治樹先生、そして宮部頼子先生の後任には私、中村が着任いたしました。二人がいっぺんに代わってしまって、当人たちが不安を抱えて新体制での課程運営を開始したことで、皆さまに何かとご迷惑とご不便をおかけしたものと、今さらながら、あらためましての着任のご挨拶と同時に、お詫びしたく思っております。着任から1年になろうという今になって、年度当初のことに思いがいたった次第です。

本年度の後期には、兼任講師にお二人の新しい先生方をお迎えいたしました。資料組織演習の2科目で、分類のクラスが竹之内禎先生から鴛田拓哉先生に、目録のクラスが榎本裕希子先生から折田洋晴先生に、竹之内先生と榎本先生のやんごとなきご事情があって、代わられました。幸い、前任の先生方と同様に、それぞれの科目内容と主たる研究領域が一致する、心強い先生方をお迎えすることができ、ほっといたしました。学生たちも、資料・情報の組織化の奥深さを、お二人の先生方のお授業をとおして、十二分に感じているようです。資料組織の実務は一見では味気なく見えるかもしれないけれど、主題分析の知的、専門的作業のおもしろさや、資料・情報へのアクセスのポイントの提供ツールとしての目録の作成のやりがいといったものは、図書館専門職の使命の実現のよろこびにちゃんとつながっているものです。それを、学生にぜひ感じてもらいたいし、分類・目録を含んで、司書課程での学びを、この情報社会で、柔軟に、日常的に、大いに生かしてもらいたいと思っています。

立教大学の司書課程は、兼任講師の先生方に多くの教育活動を分担していただいている現実があります。教員間の意見交換や連絡・連携がないと、学生たちには、司書課程を履修していても、司書プロフェッションの全体像をつかむことが容易ではなくなってしまうのかなと思います。ひとつには、新人司書課程主任として、特任の永田先生だけでなく、嘱託講師の先生方との対話と連携を、充実させていこうと今、思っています。2011年度中は、学内で身のまわりのことだけで右往左往してしまっていたのですが、来年度は、もう少し、嘱託講師の先生方のお話をうかがいたいです。

それから、立教大学の司書課程では、歴史的に、図書館実習が必修になっていて、毎年数十館の都内近郊の図書館さんに、2週間の実習生の受入とご指導をお願いしています。この実習館の方たちとの連絡・連携も、とても大きな課題と認識しております。ご指導いただいている図書館さんへの感謝の気持ちは常に忘れていないし、なるべく多くの館に伺って、実習生の様子を教えていただき、司書課程の教育の改善・充実につなげていきたいと思っています。実習受入館の皆さま、どうぞこれからも、学生ともども、よろしくご指導いただきたく、お願いいたします。なお、今号には、埼玉県立図書館の浦和図書館副館長の乙骨敏夫氏と企画担当の荻原俊文氏に、寄稿していただくことができま

した。今年度秋、埼玉県立図書館とは、埼玉県と本学の包括連携協定の枠組みの中で相互の連携・協力を探り、来年度以降は、図書館実習生の受入を実現していただけることになりました。本当にありがたく、嬉しく思っております。

職員の方たちの働き方を見聞きするにつけても、図書館の現場の状況は厳しく、図書館への就職の道はとても狭くなっています。しかし、埼玉県立図書館もそうですが、多くの実習受入れ館の様子をうかがっても、図書館に専門職がまったく消えてしまっているわけではありません。非常勤職員の増加、業務委託等等が進む中で、かえって、数少ない正規職員の司書の専門的な知識・技能の必要性が高まっている一面があると思います。立教大学の司書課程が、そうした図書館の現場の現実を受けとめながらも、共に、よりよい社会の実現のための図書館と図書館専門職のあるべきすがたを、連携して追究し、その実現に貢献できればと思っております。どうぞこれからも、ご指導ご鞭撻のほど、皆さまよろしく願いいたします。

中 村 百合子  
(立教大学司書課程主任)

### 「図書館の魅力」についての往復書簡掲載実現の経緯

文学部の沼尻晃伸先生が、図書館が大好きでいらっしゃるという話を立ち話でうかがった。その思いを記した文章があるとのことで、軽い気持ちで見せていただいたら、私にはどすんと重く、心を動かされた。図書館界で今、起きていること、図書館の判断に、ご理解をいただけていない（共感してはいただけていない）ことも書かれているのであるが、図書館を愛する気持ちは、図書館人と大いに共有していることが感じられた。こういう利用者の方たちと、図書館は対話を続けていかなければならない、とも思った。そこで、沼尻先生の文章で言及されている埼玉県立図書館さんに、寄稿をお願いした。ここで両者によって語られているテーマは近年の図書館の変化について多岐にわたっているが、特に、機能単位による分担収集・提供と、包括なコレクションのサイト・アベイラビリティ（site availability）や知の小宇宙の実現という理想との一種の対立・矛盾に関わる議論は、奥の深いものと思われる。日本社会でも、現在以上に、広く議論されてよいだろう。（文責・中村百合子）